

「ベトナム語と中国語」

1. はじめに

昨年秋に中文会のベトナム旅行に参加しました。友達から聞いて憶えたベトナム語「シンチャオ」は「こんにちは」の意味で、挨拶は通じました。また、ベトナムは日本と同じく漢字文化圏と聞いていました。でもベトナムで、街中にあるのはアルファベットのみ、漢字からは遠く離れた世界です。

「ベトナム」＝「越南」と聞いた記憶がありましたので、多くの人に「シンチャオ」を漢字で書くとどうなるかを聞きましたが、誰も知りませんでした。漢字の影響は一体どこへ行ってしまったのか？そもそも、言葉とはなにか、その成り立ちとともに、これらの謎を解いて見たいと思います。

「漢字文化圏」とは、漢字と共に古代中国の文化の影響を受けた地域で、中国、朝鮮半島、日本、台湾、ベトナム、が含まれます。言葉には文化を運ぶ役割があり、宗教的には、大乘仏教を信仰した歴史がある仏教文化圏で、また、思想的には、儒学文化圏でもある文化的に共通性のある地域です。

ベトナムも、地理的、歴史的に、中国の影響を強く受けて、国境に南北に走るアンナン山脈で隔てられた隣国のラオス、カンボジアがインド文化圏に属するのに対し、漢字文化圏にあります。

漢字文化圏の国では近世に至るまで漢文が公式に使用されていた

ので、独自の言語を持っていたものの、固有文字の他に漢字を取り入れました。そのため、異言語の異国の人同士が漢文を介してする意思疎通が可能でした。日越国交樹立40周年の昨年秋、記念番組で、日本人医師、浅羽佐喜太郎とベトナム民族主義運動の指導者の潘佩珠（ファン・ボイ・チャウ）との友情を描いた作品がテレビで放映されましたが、二人は、筆談で意思疎通をはかったそうです。当時ベトナムでは漢字が使われ、漢文の筆談が可能だった訳です。約百年前のことです。

今はどうか。孔子廟で漢字を見た位で、ベトナム航空カウンターメニュー、空港表示、街中の看板どれを取っても、アルファベットに帽子、お皿、巻き毛、各方向のちょんまげ、ゴマ粒等がついた、独自の文字ばかりです。漢字は、一体どこに消えたのか？

ベトナム語の数の読み方も謎で日本語は、いち、に、さん、し、ご、ろく、なな、はち、きゅう、じゅう、福建語は、イット、ジ、サム、シ、ンゴ、リック、チト、パット、キウ、シップの順です。勿論、発音は異なります。でも、類似性を感じる言葉もあります。同じく、ベトナム語では、モツ、ハイ、バー、ボン、ナム、サウ、バイー、ターム、チン、ムオイと全く類似性を感じません。数詞は意味が一義的に決まる表意文字の典型で、漢字文化圏なら、当然に類似性があるはずなのに、何故？

2. 言葉と文字

まず、言葉とは何か、成り立ちを考えて見ます。獣と比べて体力が劣る人が生きるために、群れることが必要で、意思疎通の手段である言葉と、火を使うことこそが人の生存、存続には必須だったと思います。意思疎通の手段として視覚に訴えるか、聴覚に訴えるかがあり、視覚では、身振り、絵、聴覚では、言葉があります。また意思疎通前に、意思形成が必要でその過程でも言葉を使い、言葉は人にとって大変有効な道具です。

言葉の定義とは、「ある意味を表すために、口で言ったり、字に書いたりするもの＝言語。」で、「ある意味」を「口で言ったり」「字に書いたり」する、「意」、「音」、「語」、の三つの要素で言葉、更に文字を考えてみます。

人にとって、事柄や物が意味を持つのは、人に係わりがあるからで、ありふれて不要なら、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」と、十把一絡げで、名無しです。

そして、人が何に意味を見出すかは、生活環境で異なります。南米のある種族には「時」の観念が、また、他の種族には、「数、色」の観念がないとされています。

言葉の「言」は「言う」こと発声することで、「沈黙の民」は存在しません。でも、独自の文字を持たない例に、韓国のハングル使用を決めたインドネシアのチアチア人、中国の少数民族トン族、

アイヌ民族、パスパ文字制定前の元、等があります。

「語」は、「語る」こと、互いに言葉を交わすことです。面前で話すには文字は不要ですが、隔地間でも時を経ても、意思を伝える手段として、文字があり、独自にせよ、借用にせよ、文字を持っている民族が多いことは確かです。

言葉につき、まず発声ありき、次に文字あり、とも言えますが、文字借用の場合は、文字に固有の発声をあてがうこともあります。

何故、文字が使われたかの理由に、必要だから、とか、特定階層の権力誇示の道具とされたとか、説があります。でも、即時に消滅する発声を保存する手段として、文字は極めて有効であり、文字を道具として使えること、つまり、識字率が高まれば、意思の形成、疎通の質が飛躍的向上します。

文字の種類について、「意」、「音」、「語」、の要素で考えると、「表意文字」、「表音文字」「表語文字」とに分けられます。

「表意文字」は、アラビア数字に代表される既に述べた数詞です。アラビア数字は、角の数をもって一意的に数を示す表意文字です。

「表音文字」に、アルファベット等「音素」表示する「音素文字」「かな」のように、音素集合体の「音節」を表示する「音節文字」があります。

「表語文字」の代表が漢字です。文字通り言葉を表わす文字です。

古代中国で漢字を発明したのは蒼頡（そうけつ）で、足跡を見て

その主の鳥獣を推測できるとして従来の縄の結び目に代えて、概念を文字で表現できると気付いたととされ、その観察力から、肖像画には、項羽と同様に、四つの目が描かれています。ただし、蒼頡の「蒼＝倉」で創造力を、「頡」は「頁＝頭」に、「吉＝壺に一杯にして蓋をした」を表わしており、知恵者であることを示す名前で、伝説上の人物だとされています。

後漢時代の許慎（きょしん）は最古の漢字字典「説文解字」の中で、約一万字の漢字の成り立ちを漢字造字、運用の原理の「象形・指事・会意・形声・転注・仮借」の6種に分け、解説しています。これを見つつ、表語文字の漢字がどのようにして、六万字もの数となったかを、以下見て行きます。

「象形文字」は、日・月・木のように、事物の形を描いて簡略化した文字です。

「指事文字」は、上・下・末のように、絵として描きにくい一般的な事態を、抽象的な約束や印で表わした文字です。

「会意文字」は、武（戈＋止）のように、象形文字や指事文字を組み合わせて、更に複雑な意味を表わそうとした文字です。

「形声文字」とは、文字の片側に意味を表す意符を、他方に音を表わす音符と組み合わせた文字、「意符シ（さんずい）＋音符工」＝「江」で、漢字の9割を占めると言われています。確かに、新たな事象を表現するために、漢字は数を増し、お蔭で、微妙な表現も

可能となって、言葉が豊かになる面はあります。人民日報は字画数56画の文字「ビィアン」を最多字画数漢字として発表しており、字画は増殖する傾向があります。

但し、文字は一部の階層が独占するものではなく、実用性から、一般の多くの人を使うまでに普及すると、簡略化が求められる傾向があり、例として、古代エジプトの神聖文字、神官文字、民衆文字の推移、中国語の繁体の簡体への移行、日本語の漢字から仮名文字への簡略化、等があります。

3. ベトナムの歴史

ベトナム語は、総人口の約9割を占めるキン族の母語で話者数が7千万人の公用語です。歴史的に何層もの言葉が融合していますが言語学的に言うと、南アジア語族モン・クメール語派に属します。キン族の直接の先祖の古越人は、東南アジアで最古の青銅器文化を発達させて、原始的ながら小規模の国家群を形成していましたが、秦の始皇帝の軍隊が、南方に侵攻して、ベトナム北部に象郡を置きました。秦滅亡後の混乱に乗じての中原の反乱軍の進入に対して、侵攻軍の副将、趙佗が阻止命令を発し、象郡と桂林郡を併合し建国したのが、初めての王朝、南越国で、紀元前203年のことです。

南越国は、この地域に誕生した初の封建国家で、秦の中原出身者の統治者は、先進的な政治制度と生産技術、秩序と安定をもたらしたその「和輯百越」政策は、漢族と南越国内部の各民族間の融和をも

促進し、同時に、漢文化と漢字がこの地に移入されて、その文化に大きな影響を与えました。

南越国は、五代約百年で、漢の武帝により平定され、それ以後、千年以上にわたって中国の支配を受ける北属の時代が続いたため、東南アジア近隣民族とは異なり、インド文明を殆ど受容せず、漢字を使用し、中国風の姓を持つなど中国文明を広く受け入れました。ただ、完全に中国に同化はせず、一定の独立を保ち、唐末期の中央政府の混乱で中国支配が衰えると938年に最初のキン族の王朝とされる呉朝が成立し、さらに丁朝と呼ばれる王朝が興り、これらの王朝は、周辺の少数民族を従え、南進して、ベトナム南部を領土とするチャンパ王国としばしば争い17世紀に黎朝が現在のベトナム領土をほぼ確定させました。

4. ベトナム語

さて、謎の解明です。その鍵として「漢越語」「チュー・ノム」「クオック・グー」があります。

「漢越語」とは、歴史的経緯による中国から借用語である漢字の熟語のことで、「チュー・ノム」とは、漢字では表現出来ない単語を表現するため、漢字を応用して作ったベトナム独自の文字です。多くの文書で、漢字が正字として扱われたのに対し、チュー・ノムは長らく俗字扱いでした。しかし黎朝末期の光中帝の時代に、公用文に使われるようになりました。これらは、表語文字です。

「クオック・グー＝國語」は、17世紀に、イエズス会宣教師が考案したラテン語の表記法で20世紀に入り改良され、使用されることとなりました。その間には、フランスの植民地化、日本の仏印進駐、独立、ベトナム戦争、中越戦争等がありますが、ベトナムの独立運動を推進した民族主義者は「クオック・グー」で育ったため漢字やチュウ・ノムは、不便性と非効率性を理由に排除され、阮朝滅亡とベトナム民主共和国の成立により、漢字に代わるベトナムの国字として、クオック・グーでのベトナム語表記が正式の表記法とされました。そのため、表記法としての漢字、チュウ・ノムの使用は、伝統行事、仏事、冠婚葬祭に限定され、漢字の理解者も、高齢者、学者、仏僧、日本語学習者等に限定されることとなりました。

但し、クオック・グーは、声の高低も含めて音を表わす表記法の問題であって、表音文字が表わす中身とは、表語文字である漢字、チュウ・ノムです。漢字の影響は表面的に見えないだけなのです。ベトナムの街に、漢字が見当たらない理由はこれです。

ベトナム語の数の呼名の謎は？

これらには、チュウ・ノムが割り当てられ、それをクオック・グーで表記しているのです。例えば、「五＝ナム」は、左に音の「南」右に意味の「五」、「九＝チン」は、左に意味の「九」、右に音の「珍」を組み合わせた形声文字のチュウ・ノムで、クオック・グーで表記したものです。

表題の「ベトナム語と中国語」ですが、共通点は、声調言語で、孤立語で、語形変化しないことの三点で、日本語とは異なります。

声調とは、音の高低のことで、ベトナム語は六声、中国語は四声で、詰まる声調は消滅しました。

孤立語とは、膠着語の日本語のように、語幹に語尾を変化させて付着させていく言葉ではなくて、「私ベトナム人ある よろし。」的な表現をするということです。

語形変化がないとは、同じ動詞の「食べる」が、過去形、命令形により語尾変化しないことです。

言葉は異民族、異文化との接触や交流によって影響を受けます。また、遠隔地でも、民族の同一性から、言葉が近い例もあります。同じ国でも、生活圏、民族の違いで言葉が異なることも有ります。中国語で、詰まる声調（入声）が消滅した理由は、元王朝を開いたモンゴル人が、入声が苦手で、後にも復元されなかったからです。

新疆ウイグル自治区で話されるウイグル語は、アラビア文字表示ですが、トルコ語と近似し、両者の源は、突厥に遡るとされます。日本の委任統治領だったパラオで「ツカレナオス」がビールを飲むことを指す例も有ります。中国の北京、上海、広東、福建等では、それぞれ話し言葉が異なります。

同じ漢字文化圏の日本も、受け入れ時期で、漢字の発音が異なり「明るい」の「明」の音読みは、奈良時代に長安から持ち帰られた

漢音は「メイ」、それ以前に既に定着していた呉音では「ミョウ」となります。隋が南北分裂を統一し、長安を都とする前は、日本は南朝宋を宗主と見做したので江南（かつての呉）の発音なのです。呉音が漢音との比較でベトナム語と似ている発音は、「米＝マイ」「男＝ナン」「二＝ニ」の等ですが、江南の地故の近さがあるかも知れません。阿倍仲麻呂は唐からの帰国の途上で、安南に漂着し、また、節度使としては、ハノイに赴任した記録もあります。日本とベトナムとは、意外と近いです。

「クオック・ゲー」はベトナムの人にとり、独立の象徴でもある大切なものですが、漢字文化圏にある者として、漢字の表記法が忘れられることは、大変残念です。

中国の新聞記事に、漢字文化圏の中日韓三国での共通常用漢字が今年に制定される旨、記載されていました。その数、808字で、この字を覚えれば、漢字の看板の8割は理解でき、これを通じて、三か国の人々の簡単な意思疎通が可能となる、とのことでした。

ベトナム人が日本語を学習する際、漢越語のメリットが大きいと言われています。日本語能力試験出題語彙全体の半分を占める二字漢字語約4千語の日本語と漢越語の意味の一致状況調査で、漢越語知識は中級者以降に効果があり、学術専門用語の学習にも、役立つ可能性が大、と言われています。

最後に「こんにちは」の意味の「シンチャオ」です。日本に戻りネットで調べて謎が解けました。

「シンチャオ」は、チュウ・ノムで「吁嘲」と書くとのこと。

「吁」とは丁寧語。「嘲」にあざける意味はなく、「禽経」に「林鳥は朝を以て嘲し、水鳥夜を以て啜す」との記載があります。

「嘲」とは、朝の鳥の囀りです。

ベトナムの街で、朝、店の軒先に鳥籠を下げ、その下で、鳥の声を聞いている人達を見かけました。鳥を愛する数多くの人達が、小鳥のように爽やかに、口々に挨拶を交わし合う、緑溢れる朝の一時。

「吁嘲」の意味がわかりました。 (終わり)